キズナエピソード

袖城 セイラ　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

「あぁ、この2人はくっつくね」

ここあがそう予想したとおり、

あれから数日後。俺はセイラに告白し、付き合うことになった。

おずおずとしたゆっくりのペースではあったけれど、

デートも重ねていった。

そして今日、3回目のデートをした。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//帰り道・外

［とびお］

「いやぁ、楽しかった！」

［セイラ］

「そうね。

あのちっちゃなサメが可愛かった」

［とびお］

「ちょっと混んでたのがアレだったけど、

セイラは人酔いとかしなかった？」

［セイラ］

「ふふっ。大丈夫よ。

とびおが連れていってくれるところは、

全部楽しいわ」

［とびお］

会話を楽しんでいるうちに、

いつの間にか彼女の家までたどり着いた。

［とびお］

「うーん、楽しい時間はあっという間だな。

じゃ、またな、セイラ」

［セイラ］

「あ、待って。いつも楽しいところに

沢山連れて行ってもらってるから……

今日はお礼にお茶でもご馳走させて……？」

//暗転

//セイラの部屋

［とびお］

正直、もっと一緒に居たいと思っていた俺は、

セイラの誘いに応え、あがらせてもらった。

［とびお］

セイラの部屋は、とても上品だった。

清潔に整えられていて、余計なものはあまり置いていない。

いかにもセイラらしい部屋だ。

［セイラ］

「とびお、好きな音楽家はいる？」

［とびお］

「好きな音楽家？

バ、バッハとか？」

「セイラ］

「いいわね、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ。

私も好き」

［とびお］

微笑んだセイラがコンポのボタンを押すと、

卒業式でよく聞くようなゆったりとした曲が流れ始めた。

緊張してた俺の心が、和らいでいく。

［とびお］

その後、セイラが淹れてくれたコーヒーを楽しみながら、

俺は彼女とゆったりとお喋りをした。

［セイラ］

「ここに誰かを呼んだのは、久しぶりなの」

［とびお］

しばらくして、セイラはそう切り出してきた。

［とびお］

「へぇ。それは嬉しいな。

じゃあ、今度は俺がセイラを招待するよ。

ここと比べると、ちょっと刺激的かもしれないけど」

［セイラ］

「ふふっ。やっぱり、とびおは優しい。

初めて会った日と同じで、何も聞いてこないのね。

私の心に無理に触るようなことをしない……」

［とびお］

「そう？　たまたまだよ、たまたま」

［セイラ］

「そのたまたまが、私には嬉しいの。

でも、今日は聞いてくれる……？

とびおには話しておきたいと思ったから……」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

俺が頷くと、セイラは一呼吸おいてから話し始めた。

「私には姉がいたの。

バレエがすごく上手で、綺麗で、聡明で、優しくて、

私なんかじゃ絶対適わないような、完璧な人、

とても魅力的な姉が……。

私は姉のことが本当に大好きで、

小さい時からいっつもワガママを言って甘えて困らせたりしていて……。」

//次ページ

「だけど、姉はもうこの世にはいないの……。

　バレエの大会の帰り……脇見していた車に轢かれて……。

　私は姉を失ったことがショックで、

　しばらくは何も手につかなくて、誰とも接することが出来なかった……。」

//次ページ

//セイラ涙声

「それからなの……。

　大切な人を極力作らないようになったのは。

　だって、怖くて……。失くしたくなくて……。

　大切な人なんてもういらないって……。」

「……でも」

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［セイラ］

「でも、あのとき勇気を出して良かった」

［とびお］

「あのとき？」

［セイラ］

「えぇ、あなたのあの言葉を聞いたとき」

//回想開始

//都立有羽・校舎裏

［とびお］

「セイラ、お前のことが好きだ。

もし良かったら、俺と付き合ってくれ……！」

［セイラ］

「……！」

［セイラ］

「………………はい。

不束者ですが、よろしくお願いします」

//回想終了

//セイラの部屋

［セイラ］

「本当に……本当に良かった。

とびお、ありがとう」

［とびお］

嬉しそうに、セイラは笑った。

愛しさで胸が一杯になり、俺は彼女のそばに寄っていく。

セイラは、静かに目を閉じる。

［とびお］

そして、俺は彼女を抱き寄せると、優しく唇を重ねた。

//【R18版の場合、ここに挿入】

//ADV形式終了

//3話END